

第4週間の水曜日

第19カフィズマ

第1段 第134、135 聖詠

しゅ な ほ あ しゅ しよぼく しゅ いえ わ かみ いえ にわ た もの ほ あ しゅ
主の名を讃め揚げよ、主の諸僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め揚げよ。主

ほ あ しゅ じんじ そのな うた こ たの けだししゅ おのれ ため
を讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌へ、是れ楽しければなり。蓋主は己の爲

にイアコフを選び、イズライリを選びて其業となせり。我主の大なるを知り、我等の主

の諸神より最高きを知れり。主は凡そ欲する所を天に地に海に悉くの淵に

行ふ、雲を地の極より起こし、電を雨の中に作り、風を其庫より出す。彼はエギ

ペトの初子を撃ちて、人より家畜に及べり。エギペトよ、彼は爾の中に於て休徴奇跡

をファラオン及び其悉くの僕の上に遣せり。彼は多くの民を撃ち、有力の王を

滅せり、即アモレイの王シゴン、ワサンの王オグ、及びハナアンの諸國なり、彼等の

地を賜ひて業となし、其民イズライリの業となせり。主よ、爾の名は永く在り、主よ、

爾の記憶は世に在り。蓋主は其民を審判し、其諸僕に憐を垂れん。異邦の

偶像は乃銀、乃金、人の手の造工なり。彼等口ありて言はず、目ありて見ず、耳あ

りて聴かず、其口に呼吸なし。之を造る者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズラ

イリの家よ、主を崇め讃めよ。アアロンの家よ、主を崇め讃めよ。レウィの家よ、主を崇

め讃めよ。主を畏るる者よ、主を崇め讃めよ。イエルサリムに在す主はシオンに崇め讃め

らる。「ア ril イヤ」。<145 聖詠省略>

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す。

(詠) 今も何時も世に、「アミン」

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光栄は爾に帰す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光栄は父と子と聖神^oに帰す。

中の週(第4週)は特別な点が多いので要注意。

1. カノンが三歌頌のみでなく全歌頌
2. カノンで復活のイルモス
3. 光耀歌も八調でなく特別
4. 「主や爾に」生神女讃詞も特別 など

誦經者の「光榮は」に続いて

今も何時も 世々に アミン アリルイヤ、アリルイヤ アリルイヤ

3回

神よ光榮は なんじに 歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、

誦經者の「今も」に続く

光榮は 父と子と 聖神に 歸す

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第二段 第 137-139 聖詠

われこころ つく なんじ さんえい しょてんし まえ おい なんじ うた けだしわ くち ことば なんじ
我 心 を盡して 爾 を讚榮し、諸天使の前に於て 爾 に歌ふ、蓋 我が口の言は 爾

ことごと これ き われなんじ せいでん まえ こうはい なんじ あわれみ なんじ しんじつ ため
悉 く之を聴けり。我 爾 が 聖殿の前に叩拜し、 爾 の 憐 と 爾 が 眞實の爲に

なんじ な さんえい けだしなんじ なんじ ことば こうだい もろもろ なんじ な こ
爾 の名を讚榮す、蓋 爾 は 爾 の言を廣大にして、 諸 の 爾 の名に逾えしめたり。

わ よ ひ なんじわれ き わ たましい いさ しゅ ち しょうなんじ くち ことば
我が呼びし日、 爾 我に聴き、我が 靈 を勇ませたり。主よ、地の諸王 爾 が口の言

き とき みななんじ さんえい しゅ みち うた けだししゅ こうえい おおい しゅ たか
を聴かん時、皆 爾 を讚榮し、主の途を歌はん、蓋 主の光榮は大なり。主は高く

へりくだ もの み ほこもの はるか し われも かんなん うち ゆ なんじわれ い
して、謙 る者を見、誇る者を 遙に識る。我若し艱難の中に行かば、 爾 我を生かし、

なんじ て の わ てき いかり おさ なんじ みぎ て われ すく しゅ われ かわ
爾 の手を伸べて我が敵の怒を抑へん、 爾 が右の手は我を救はん。主は我に代りて

おこな しゅ なんじ あわれみ よよ なんじ て つく もの す なか
行はん、主よ、 爾 の 憐 は世世にあり、 爾 の手の造りし者を棄つる母れ。

誦經 光榮は父と子と聖神に歸す。

(詠) 今も何時も世々に、「アミン」

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に歸す。(三次)

主憐めよ。(三次) 光榮は父と子と聖神^oに歸す。<上記と同じ>

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

第三段 (第 140、141、 聖詠)

しゅ わ いのり き なんじ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんじ ぎ よ われ
主よ、我が 禱 を聆き、 爾 の 眞實に依りて我が 願 に耳を傾けよ、 爾 の義に依りて我

き たま なんじ ぼく うったえ な なか けだしおよ いのち もの いつ なんじ まえ ぎ
に聴き給へ。爾の僕と訟を爲す母れ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義と

せられざらん。敵は我が靈を逐ひ、我が生命を地に蹂り、我を久しく死せし者の如

く暗に居らしむ、我が靈は我の衷に悶え、我が心は我の衷に曠しきが如し。我古

ひ おも およ なんじ おこな かんが なんじ て わざ はか わ て の なんじ
の日を想ひ、凡そ爾の行ひしことを考へ、爾が手の工作を計る。我が手を伸べて爾

むか わ たましい かわ ち ごと なんじ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい
に向ひ、我が靈は渴ける地の如く爾を慕ふ。主よ、速に我に聴き給へ、我が靈

おとろ なんじ かんばせ われ かく なか しか われ はか い もの ごと われ
は衰へたり、爾の顔を我に隠す母れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我

つと なんじ あわれみ き たま われなんじ たの しゅ われ ゆ みち しめ
に夙に爾の憐を聴かしめ給へ、我爾を頼めばなり。主よ、我に行くべき途を示し

たま わ たましい なんじ あ しゅ われ わ てき すく たま われなんじ はし
給へ、我が靈を爾に擧ぐればなり。主よ、我を我が敵より救ひ給へ、我爾に趨り

つ われ なんじ むね おこな おし たま なんじ われ かみ ねが なんじ ぜん
附く。我に爾の旨を行ふを教へ給へ、爾は我の神なればなり、願はくは爾の善な

しん われ ぎ ち みちび しゅ なんじ な よ われ い たま なんじ ぎ よ
る神は我を義の地に導かん。主よ、爾の名に依りて我を生かし給へ、爾の義に依り

わ たましい くなん ひ いた たま なんじ あわれみ もつ わ てき ほろぼ およ わ
て我が靈を苦難より引き出し給へ、爾の憐を以て我が敵を滅し、凡そ我が

たましい せ もの たいら たま われ なんじ ぼく
靈を攻むる者を夷げ給へ、我は爾の僕なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す。今も何時も世に、「アミン」。

「アイルイヤ」「アイルイヤ」「アイルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

しゅあわれ
主 憐めよ。三次

<続けて誦経>

斎1 セダレン 【坐誦讃詞】イオシフの作 6調

せつせい とき せい な しんせい そんき じゅうじか ふくはい ため お われら いきぎよ りょうしん
節制の時なり、聖を成す神聖尊貴なる十字架は伏拜の爲に置かれたり。我等潔き良心を

もつ つ せいせい こうしょう く おそれ もつ よ じんあい わ きゅうせいしゅ こうえい
以て就きて、成聖と光照とを汲みて、畏を以て呼ばん、仁愛なる吾が救世主よ、光榮は

なんじ じれん き
爾の慈憐に歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン
(十字架生神女讃詞、同調)

こんいん あず はは かれ たね うま もの じゅうじか まえ た よ ああ こ つるぎ
婚姻に與からざる母は彼より種なく生れし者の十字架の前に立ちて呼べり、嗚呼子よ、劍は

わ ころ つらぬ われなんじ ぼんゆう ぞうせいしゅ およ かみ おのの もの き かか み しの
吾が心を貫けり、我爾、萬有が造成主及び神として戦く者の木に懸れるを見るに忍びず。

ごうにん しゅ こうえい なんじ き
恒忍なる主よ、光榮は爾に歸す。

<戻る。枠 P12、 50 聖詠 >

齋²【三歌經の規程】

第1歌頌

(詠) イルモス4調「我が口を開きて、聖神^oに満てられ、言を女王母に奉り、楽しみ祝ひ、喜びて其の奇蹟を歌はん」(楽譜：主日カタワシャに同じ)

第1歌頌 4調

我が口を ひらきて、 聖一神^o に満てら 一れ、
言を 女王母にたてまつり、 たのしみ いわ 一い、
慶びて その奇蹟を うた 一わん。

至尊なる木に伏拝せん。

われら ものいみ きよ せい き そのうえ て の てき しゅりょう か もの
我等 齋に潔められて、聖なる木、ハリストスが其上に手を舒べて、敵の首領に勝ちたる者

ふくはい さんび こうえい ぜんのうしや たてまつ
に伏拝して、讚美と光榮とを全能者に奉らん。

至尊なる木に伏拝せん。

せいせい あた すくい じゅうじか まえ お み われら からだ ころ きよ これ 一つ
成聖を與ふる救の十字架は前に置かれて見らる、我等は體と心とを潔めて、之に就きて、

すくい おんちよう く
救の恩籠を汲まん。

至尊なる木に伏拝せん。

ひと あい しゅ なんじ いましめ ひ もつ われ きよ じゅうじか もつ ふせ まも われ なんじ すくい
人を愛する主よ、爾の誠の火を以て我を潔め、十字架を以て防ぎ護りて、我に爾の救の
くるしみ み あい もつ これ ふくはい え たま
苦を見、愛を以て之に伏拜するを得しめ給へ。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

ひと あい しゅ なんじ う もの なんじ じゅうじか あ み な よ いかん
人を愛する主よ、爾を生みし者は爾が十字架に上げられしを見て、泣きて呼べり、如何ぞ
ぼんしゅう しんぼん もの ていざい こうえい しゅ かか み
萬衆を審判すべき者は定罪せられ、光栄の主は懸りて見らるる。

第3歌頌

(詠) イルモス4調 「生神女、生活にして盡きざる泉よ、祝ひて爾を讃め歌ふ者の靈を固め、
彼等に爾が神妙なる光栄の中に栄冠を冠らしめ給へ」

第3歌頌 4調

生 神 女 生 活 に し て 尽 き ざ る い ず み や、
祝 う て 爾 を 讃 め 歌 う 者 の 靈 を か た め、 彼 等 に 爾 が 神 妙 な る
光 栄 の う ち に、 栄 冠 を 被 ら せ た ま ー え。

至尊なる木に伏拝せん。

われら ものいみ みず もつ こころ きよ ねつしん じゅうじか き いだ そのうえ かか
我等は 齋の水を以て心を潔めて、熱信に十字架の木を抱かん。ハリストスは其上に懸りて、
おんしゅ われら しゃざい みず なが たま
恩主として、我等に赦罪の水を流し給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

み すくい ふね じゅうじか ほ すす ものいみ なかば す かみ これ
見よ、救の舟は十字架の帆に進められて、齋の半を過ぎたり。メッシヤイイス神よ、此
もつ われら なんじ くるしみ みなど おく たま
を以て我等を爾の苦の港に送り給へ。

至尊なる木に伏拝せん。

じゅうじか やま おい なんじ かたど てき こころ いた われら こころ うち なんじ
十字架よ、モイセイは山に於て爾を形りて、敵の殺さるるを致せり。我等は心の中に爾を
かたど なんじ み ふくはい なんじ ちから もつ わけい てき か
形り、爾を見て伏拜して、爾の力を以て無形の敵に勝つ。

光栄は父と子と聖神に帰す。今も何時も世々にアミン。

わ こ なんじ ばんゆう かみおよ ぞうぶつしゅ あまん ひと な いまわれなんじ
吾が子ハリストスよ、爾は萬有の神及び造物主にして、甘じて人と爲れり、今我爾が

じゅうじか かか み ところ き なんじ う もの い
十字架に懸れるを見て心刺さると、爾を生みし者は言へり。

第3歌頌

イルモス「萬有の王、造物主たる者」6調 省略

彼は其の聖者の足を守る、不法の者は幽暗の中に消ゆ、

ばんゆう しゅおよ ぞうぶつしゅ かみ なんじ ち なか じゅうじか のぼ てき あくけい よ おちい ひと せい
萬有の主及び造物主神よ、爾は地の中に十字架に升りて、敵の悪計に因りて陥りし人の性

おのれ のぼ たま ゆえ われら なんじ くるしみ かた ねつしん なんじ さんえい
を己に升せ給へり。故に我等爾の苦に堅められて、熱信に爾を讃榮す。

蓋人の力を持て堅固なるに非ず、主は之に敵する者を碎かん、主は聖なり。

しんじゃ われら ものいみ ひかり かんかく きよ じゅうじか むけい こうせん さかん かがや その こんにち
信者よ、我等齋の光にて感覺を潔め、十字架の無形の光線にて盛に輝かされて、其今日

まえ お み つつし きよ くち ところ もつ せつぶん
前に置かるるを見て、敬みて淨き口と心とを以て接吻せん。

智者は其の智を以て誇る勿れ、強き者は其の力を以て誇る勿れ、富む者は其の富を以て誇る勿れ。

われら あし た ところ しんせい じゅうじか ふくはい わ たましい あし かみ いましめ
我等はハリストスの足の立ちし所に、神聖なる十字架に伏拜して、吾が靈の足が神の誠

いし かた かみ おんちよう よ そのあゆみ へいあん みち むか もと
の石に堅められて、神の恩寵に因りて其歩を平安の途に向はしむるを求めん。

誇らんと欲する者は主を悟りて彼を知り、且つ地の中に審判と義とを行ふを以て誇るべし。

ばんじゅ おつと あずか どうていじょ たましい にくたい と かれ い なんじ
ハリストスよ、爾は夫に與らざる童貞女より靈ある肉體を取り、彼より出でて、爾の

じゅうじか もつ てき ほろぼ く ひと せい またあらた たま ゆえ われら なんじ じれん さんえい
十字架を以て敵を滅して、朽ちたる人の性を復新にし給へり。故に我等爾の慈憐を讃榮す。

のぼ とどろ はて
主は天に升りて轟けり、彼は義にして地の極を審判せん。

ち しきよく ふくはい き そのうえ か あくま ほろぼ ところ もの み
地の四極よ、伏拜せらるる木、ハリストスが其上に懸けられて、悪魔を滅しし所の人を見

よろこび うた たてまつ
て、歡喜の歌を奉れ。

彼は力を以て其の王に賜ひ、其の膏つけられし者の角を高くせん。

こんにちのち ほどこ よろこび すす みなきた おそれ もつ どうと じゅうじか ふくはい
今日生を施す歡喜は進めらる、皆來りて、畏を以てハリストスの尊き十字架に伏拜せん、

せいしん う ため
聖神を受けん爲なり。

光榮は父と子と聖神に歸す。

さん こうせん ひ さんこう かがやき かみちち こ およ せいしん むげん せい およ こうえい なんじ うた もの かんなん
三光線の日、三光の輝煌、神父、子、及び聖神、無原なる性、及び光榮よ、爾を歌ふ者を患難
より救ひ給へ。

今も何時も世々に、「アミン」

おんちよう こうむ さんび しょうしんどうていじょ てんし ひんい なんじ うた かれら とも じんるい いまなんじ
恩寵を蒙れる讚美たる生神童貞女よ、天使の品位は爾を歌ふ、彼等と偕に人類は今爾を
聘女ならぬ聘女として讚榮す。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

いのち ほどこ じゅうじか われなんじ ふ ため きた おそ おの わ しゅ しんせい ち なんじ うえ
生を施す十字架よ、我爾に觸れん爲に來りて畏れ戦く、吾が主の神聖なる血が爾の上に
なが 流されしを知らばなり。

(詠) イルモス 1調「主よ爾が敵に勝ち、世界を照らしし所の爾の十字架の力にて獲たる爾の教会を固め給へ。」

第3歌頌—21調

主よ、なんじが てきに 勝ち 世界を照らししところの
なんじの 十字架の ちからにて 獲たる 爾の教会を
かため た ま え。

<セダレン省略>

【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



第4歌頌

(詠) イルモス4調「光栄の中に神性の宝座に坐するイイスス神は、軽き雲に乗るが如く、朽ちざる手に抱かれ来たりて、ハリストスよ、光栄は爾の力に帰すと呼ぶ者を救ひ給へり。」



至尊なる木に伏拝せん。

昔^{むかし}光^{こう}榮^{えい}なるイアコフは手を又へ伸べて、十字架^{じゅうじか}の形^{かたち}を兆^{しる}し、孫^{まご}に祝^{しゅく}福^{ふく}して、我等^{われら}衆^{しゅう}に至^{いた}る
所^{ところ}の救^{すくい}の祝^{しゅく}福^{ふく}を兆^{しる}せり。

至尊なる木に伏拝せん。

我等^{われら}は十字架^{じゅうじか}の印^{いん}に護^{まも}られ、其^{その}我等^{われら}の前^{まえ}に置^おかるる者^{もの}に靈^{たましい}の喜^{よろこび}を以^{もつ}て接^{せつ}吻^{ぶん}し、害^{がい}を爲^なす
肉^{にく}慾^{よく}を殺^{ころ}して、救^{すくい}の苦^{くるしみ}に往^ゆかん。

至尊なる木に伏拝せん。

最^{いと}尊^{とうと}き十字架^{じゅうじか}よ、我等^{われら}爾^{なんじ}を救^{すくい}の器^{うつわ}、勝^かたれぬ旂^{はた}、歡^{よろこび}喜^{しるし}の徴^し、死^{ころ}の殺^{ぶき}されたる武器^{ぶき}として
抱^{いだ}きて、爾^{なんじ}の上^{うえ}に釘^{てい}せられし主^{しゅ}の光^{こう}榮^{えい}を以^{もつ}て飾^{かざ}らる。

光栄は父と子と聖神[°]に帰す、今も何時も世々にアミン。

我^{われ}に見^みらるるイイスス吾^わが子^こ、我^{われ}より身^みを取りし者^{もの}よ、爾^{なんじ}は諸^{しよてんし}天使^{ちか}に近^{がた}づき難^{もの}き者^みとして見
られたり、今^{いま}我^{われ}爾^{なんじ}が木^きに釘^{てい}せられしを^み見て哭^なくと、ハリストス^{はは}の母^いは言^いへり。

第5歌頌

(詠) イルモス4調「萬物は爾が神妙の光榮に驚かざるなし、爾婚配を識らざる童貞女は至上の神を孕み、永遠の子を生みて、凡そ爾を讃め歌ふ者に平安を給へばなり。」

第5歌頌4調

萬物は 爾が神妙の光榮に 驚かざる なし、爾 婚配を知らざる
童貞女は 至上の神を はらみ、 永遠の子を生みて、
凡そ爾を讃め歌う者に 平安を賜えばな ー り。

至尊なる木に伏拝せん。

萬衆の生命及び救なる主よ、爾は十字架に釘せられて死者と爲れり。故に救世主よ、我等に潔められたる靈を以て之を抱きて、喜びて爾の救の苦を見るを得しめ給へ。

至尊なる木に伏拝せん。

生を施す木よ、無形の品位は敬みて爾の前に立つ、蓋ハリストスは爾の上に其尊き血を流して、人類を惡鬼の汚より潔め給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

言よ、我敵の劍に傷つけられし者を爾の血を以て醫し給へ。救世主よ、爾に呼ぶ、戈を以て速に吾が罪の書券を裂きて、我を救はれし者の書に録し給へ、爾は慈憐なる主なればなり。

光榮は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々にアミン。

熟したる葡萄の房よ、如何ぞ爾木に懸りたる、光榮の日、爾の苦にて日の光を晦まし者よ、如何ぞ没したると、救世主よ、爾を生みし牝羊は昔母として哭きて爾に呼べり。

第6歌頌

(詠) イルモス4調「三日の葬りを預象するイオナは鯨の中に在りて祈りて籲べり、イイスス萬軍の

王よ、我等を淪滅より救ひ給へ。」

第6歌頌 4調

三日の葬りを預象するイオナは、鯨の腹のうちにありて
祈りて言えり、イエス萬軍の主よ、
我を滅びより救いたまえ。

至尊なる木に伏拝せん。

主の最尊き十字架よ、爾は建てられて地獄の居處を震はせ、信者の爲に動かされぬ防固及び堅固なる帡幪と爲れり。

至尊なる木に伏拝せん。

我等は諸徳の果を結ぶ者と爲りて、神聖なる木の生を施す果、其上に伸べられしイエス、豊に實れる葡萄樹たる主の生ぜし者を摘まん。

至尊なる木に伏拝せん。

イエスよ、我等は爾の多くの仁慈を歌ひて、爾の十字架と、戈と、葦とに伏拝す、蓋爾は、洪恩なる主よ、此等を以て仇の隔の墻を毀ち給へり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

至浄なる者は爾を活ける水の川として生じたり、蓋爾は我等の更新の泉として、十字架に伸べられて、救の流を注ぎ給へり。

(詠) イルモス4調「三日の葬を預象する預言者イオナは鯨の中に在りて祈りて籲べり、イエス萬軍の王よ、我を淪滅より救ひ給へ。」(楽譜同上)

【小連祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、

我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



【コンダク 7 調】

ほのお つるぎ すで もん まも けだしこれ しりぞ しえい じゅうじか き いた し はりおよ
燄の劍は既にエデムの門を守らず、蓋之を卻くる至榮なる十字架の木は至れり。死の刺及
び地獄の勝は亡びたり、蓋爾は、吾が救世主よ、現れて、地獄に在る者に呼べり、復樂園
に入れ。<イコス略>

第7 歌頌

(詠) イルモス 4 調「敬虔の者は造物主に易へて造物に事ふることをせざりき、火の嚇しを勇ましく踏みて、喜び歌へり、讚美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる」



至尊なる木に伏拝せん。

ハリストスよ、エリセイがイオルダンより出しし斧は十字架を示せり、爾は此を以て諸民を
空虚の深處より引き出して、歌はしむ、主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

至尊なる木に伏拝せん。

十字架よ、天の者は地の者と偕に爾に伏拝するを喜び、蓋爾に由りて諸天使と人人とは
合せられて呼ぶ、主神よ、爾は崇め讃めらる。

至尊なる木に伏拝せん。

われら まつ ごと きょうじゆつ すぎ ごと こうば しん つげ ごと まこと あい けん しゆ じゅうじか ふくはい
我等は松の如く 矜恤、杉の如く 馨しき信、黄楊の如く 眞の愛を獻じて、主の十字架に伏拜

し、^{そのうえ てい}其上に釘せられし^{しよくざいしゆ あが ほ}贖罪主を崇め讃めん。

右 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

かみ えら まち かみ てん もの うご なんじ ほら い じゅうじか かか ぞうぶつ
神の選びたる城邑よ、神は天の者を動かさずして爾の腹に入りたり、十字架に懸りて造物を

うご たま わ かれ うご いし うえ つね た ため かれ いの たま
動かし給へり。我が彼の動かざる石の上に常に立たん爲に彼に祈り給へ。

第8歌頌

(詠) イルモス4調「生神女の産は敬虔の少者を爐の中に守れり、その時に預め徴され、今日に應ひし此の産は全世界に勤めて爾に歌はしむ、造物は主を歌ひて、萬世に彼を讃め揚げよ」

第8歌頌 4調

生神女の産は、敬献の少者を炉のうちにまもれり、
その時あらかじめ記るされ、今既にかないしこの産は
全世界にすすめて爾に歌わしむ、造物は主をうたいて、
世世に讃め揚げよ。

至尊なる木に伏拝せん。

しゆ なんじ き うえ て の ふせつせい て つみ と ほこ さ これ もつ てき きず
主よ、爾は木の上に手を舒べて、不節制の手の罪を解き、戈にて刺されて、此を以て敵に傷

つけ、^{い な}膽を嘗めて、^{いつらく あく のぞ}逸樂の悪を除き、^{す の}醴を飲ませられて、^{しゅう たのしみ あた たま}衆に樂を與へ給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

われら いさぎよ ちえ りょうしん もつ よろこ ちか ふくはい せい とうと き まえ お
我等 潔き智慧と良心とを以て欣ばしく近づきて伏拝せん、聖なる尊き木は前に置かる、

ハリストスは此に由りて恥づべき死を受けて、^{ざいはん}罪犯に由りて甚しく辱かしめられたる者に

さいじょう ^{そんき こうむ たま}最上の尊貴を被らせ給へり。

至尊なる木に伏拝せん。

われつみ き ころ いたらく しよく ほうむ しゅ われ い われ ふ もの おこ
我罪の木にて殺され、逸樂の嗜慾にて葬られたり。主よ、我を活かし、我臥す者を起して、

なんじ くるしみ ふくはい もの しんせい ふっかつ あずか もの なんじ あい せいしや しぎょう ぶん もの なし
爾の苦に伏拝する者、神聖なる復活に與る者、爾を愛する聖者の嗣業に分ある者と爲し

たま
給へ。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

どくせい こ われ にくたい と なんじ ひと しよし いとうるわ もの し なんじ てい
獨生の子よ、我は肉體を取りし爾を人の諸子より最美しき者と知れり、爾が釘せられしを

み きれい みぼえ しゅうじん すくい もの なんじ こうえい あらわ たま じゅんけつ
見るに、華麗もなく、華榮もなし、衆人の救なる者よ、爾の光榮を顯し給へと、純潔な

どうていじょ よ
る童貞女は呼べり。

イルモス6調「福たる少者はバビロンに於いて先祖の律の爲に」省略

第8歌頌

天の諸の位鳥、野獸と一切の家畜と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

こうおん しゅ なんじ あまん ち なか につちゅう てい ち しきよく へび くち なか ひ
洪恩なる主よ、爾は甘じて地の中に日中に釘せられて、地の四極を蛇の口の中より引き

いだ たま ゆえ われら しんせい ものいみ なか しゅうかん なんじ とうと じゅうじか ふくはい これ さんえい
出し給へり。故に我等は神聖なる齋の中の週間に爾の尊き十字架に伏拝して、之を讃榮

して呼ぶ、主を歌ひて、世々に崇め讃めよ。

人の諸子は主を崇め讃めよ、イスラエリ民は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

よろこび しるし か ぶき きょうかい かき ちめいしや ほまれ した かざり しさいしゅ かため わ よわ
歡喜の記號、勝たれぬ武器、教會の牆、致命者の譽、使徒の飾、司祭首の固よ、我が弱り

たる たましい かた なんじ ふくはい よ え ぞうぶつ しゅ うた ばんせい あが ほ
靈を堅めて、爾に伏拝して呼ぶを得しめよ、造物は主を歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

主の司祭等、主の諸僕は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

ごうにん しゅ われていざい あた もの なんじ へんぼ しんぼん わ おもい うち い とき なげ な
恒忍なる主よ、我定罪に當る者は爾の偏頗なき審判を我が思念の中に入る時、歎きて泣く。

ゆえ われ なた わ たましい おも に かる たま わ よろこ よ ため ぞうぶつ しゅ うた
故に我を宥めて、吾が靈の重き任を軽くし給へ、我が歡びて呼ばん爲なり、造物は主を歌

ひて、萬世に崇め讃めよ。

諸神^{たましい}と諸聖人の靈^{けんび}と、諸義人と心の謙卑なる者と主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

純潔なる童貞女よ、棘は智慧に超ゆる爾の産の奥密を預象せり、蓋此の如く、爾は焚か

るなく止まりて、火なるハリストス救世主、十字架に擧げられし者を生み給へり。彼に我

を永遠の火より救はんことを祈り給へ、蓋我呼ぶ、造物は主を歌ひて、萬世に崇め讃めよ。

アナニヤ、アザリヤ、ミサイルは主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

パスハのイルモス 「この撰ばれたる聖なる日は」

第8歌頌



この選ばれたる聖なる日は、唯一つにしてスポタの王ときみ
祭の祭、祝いの祝いなり、我等此の日に おいて、
ハリストスを世世に あがめほめん。

來りて、齋に潔められて、前に置かれたる主の十字架に愛を以て接吻せん、蓋此は我等の

爲に成聖と能力との寶なり。故に我等此を世世に歌はん。

主の諸使徒、預言者、致命者は主を崇め讃めよ、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

斯の三合格の十字架は小さく見ゆれども、其力は天に戻りて、常に人人を神に升す。我等此

を以てハリストスを世世に崇め讃めん。

我等主なる父と子と聖神^ほとを崇め讃めん。

我三の本質の中に唯一の神性を讃榮して、三位を一に混淆せず、又神性を分たず、蓋父、子、

およ せいしん さんい ゆいいち かみ ばんゆう うえ しゆ
及び聖神は三位にして惟一なる神、萬有の上にある主なり。

今も何時も世々に、「アミン」

どうていじよ かみ よめ なんじ はは うち ひとり もの あらわ どうてい いん まも おっと
童貞女、神の聘女マリヤよ、爾は母の中に獨の者と現れて、童貞の印を守りて、夫なく

きゆうせいしゆ う たま われら しんじや よ よ なんじ さんよう
ハリストス救世主を生み給へり。我等信者は世々に爾を讃揚す。

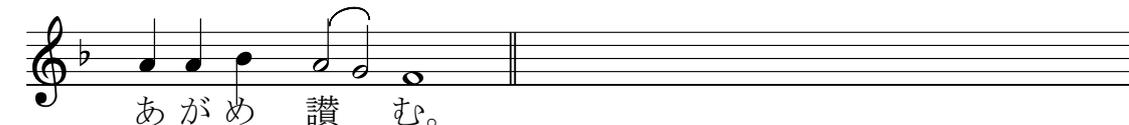
我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

こ しせい き むかし よげん しゃ よげん ごと じん がい
斯の至聖なる木、昔預言者イエレミヤの預見せし如く、イズライリ人がハリストスを害せ

ため もう もの どうと われら これ よ よ ほ あ
ん爲に設けられたる者は尊まるべし。我等此を世々に讃め揚げん。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拝みて世々に歌ひ讃めん、

(詠) イルモス 1調 「昔獅子の穴に投げられたる預言者の中に大いなるダニイル十字形に手を伸べて、其口に残はるるなく救はれて、ハリストス神を世に崇め讃む。」



司祭 生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん。

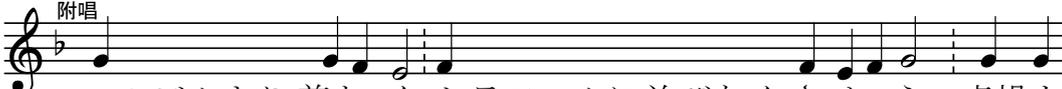
(詠) [ヘルビムの歌]

第1句 我が心は主を崇め、我が ^{たましい} 靈は神我が救主を悦ぶ。

附唱 ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、
実の生神女たる爾を崇め讃む。

第1句

 我が心は主を あがめ 我が霊は神我が救主を 喜こーぶ

附唱

 ヘルビムより尊とく セラフィムに並びなくさかえ 貞操を


 破らずして神言を生みし 実の生神女たる 爾をあげ讃む

第2句 その婢の卑しきをかえり願み給へり、今よりよろずよ萬世我を福なりと言はん、

→附唱 ヘルビムより尊く

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世
 世 彼を畏るる者に臨まん

→附唱 ヘルビムより尊く

第4句 其の肘の力を表して、心のおご驕れるものを散らし給へり、

→附唱 ヘルビムより尊く

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰
 らせ給へり。

→附唱 ヘルビムより尊く

第6句 其の僕、イズライリをい納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐
 れむ事を記憶し給へり、

→附唱 ヘルビムより尊く

第9 歌頌

(詠) イルモス4調「凡そ地に生まるる者は聖神に照らされて楽しみ、形なき智慧の性も祝ひ、神の母の聖なる祭を尊みて呼ぶべし、至りて福なる潔き生神女、永貞童女よ、喜べよ。」

第9歌頌 4調

 凡そ地に生まるるものは、 聖神に照らされて楽しみ、


 形なき 智慧ちえの性も いわい 神の母の聖なる祭を尊みて呼ぶ


 べし、至さいわいりて福なる潔き 生神女、永貞童女やよろこべよ。

至尊なる木に伏拝せん。

ひと あい しゅ なんじ ほこ よ なんじ わき ひら わ ため しゃざい いずみ なが ち なか き
 人を愛する主よ、爾は戈に由りて爾の脅を開きて、我が爲に赦罪の泉を流し、地の中に木

うえ てい き もつ ていざい とど たま われら いまものいみ なかぼ これ せつぶん なんじ じんじ
の上に釘せられて、木を以て定罪を止め給へり。我等今 齋 の半に之に接吻して、爾の仁慈
ほ うた
を讃め歌ふ。

至尊なる木に伏拝せん。

いのち ほどこ じゅうじか ふくはい こんにち あい もつ やま かんみ おか よろこび したた しゅ き
生を施す十字架伏拜の今日、愛を以て山は甘味を、岡は喜悦を 滴らせよ、主の樹
りワン ぱくこうぼく いわ よげん しゃ ちめいしゃ した およ ぎしゃ たましい けいが
リワンの柏香木は祝へ、預言者、致命者、使徒、及び義者の 靈は慶賀せよ。

至尊なる木に伏拝せん。

しゅ おそれ もつ なんじ うた なんじ たみおよ しぎょう なんじ あまん かれら ため し しの ところ もの
主よ、畏を以て爾を歌ふ 爾の民及び嗣業、爾が甘じて彼等の爲に死を忍びし所の者を
かえり たま ねが われら あく むりょう おお なんじ じれん か しじん しゅ なんじ
顧み給へ、願はくは我等の悪の無量の多きは 爾の慈憐に勝たざらん。至仁なる主よ、爾の
じゅうじか もつ われら しゅう すく たま なんじ ひと あい しゅ
十字架を以て我等衆を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン。

なんじ てい おのれ またたき もつ み せかい うご かか もの とど
ハリストスよ、爾は釘せられて己の瞬を以て見ゆる世界を動かせども、懸れる者として止
まれり、始めて造られし者の慾の念を滅し、爾の仁慈を以て其損傷を醫さんと欲したれ
ばなりと、生神女は泣きて言へり。

イルモス6調「生神女よ爾の位に合わせて能く爾を讃美する舌なし」省略

第9歌頌

あわれみ すなわち ちか
以て矜恤を我が先祖に施し、其聖なる約 即 我が祖アウラムに矢ひたる誓を記念せん、

じゅうじか むかし き もつ おの かわ ひ いた なんじ いのち ほどこ き しめ けだし
十字架よ、昔エリセイは木を以て斧を河より引き出して、爾生命を施す木を示せり、蓋ハ
りストスは 爾の上に釘せられて、此を以て諸民を偶像の邪教の深處より引き出し給へり。
ゆえ われら なんじ ふくはい くれ けんとう さんえい
故に我等爾に伏拝して、彼の權能を讃榮す。

い おそれ
謂ふ、我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼なく、彼の前に在りて、聖を以て、義を以て、生

つか
涯彼に事へしめんと。

きゅうせいしゅ なんじ てい よ ひ こうせん くらやみ な つき ひかり き ごぎょう おのの
救世主よ、爾の釘せらるるに因りて日の光線は黒暗と爲り、月の光は消え、五行は戦きて

へん 変じたり。故に我爾に呼ぶ、言よ、諸慾の暗昧に因りて變じたる吾が思を爾の手を以て
へんえき 變易し、之を照して我を救ひ給へ。

子よ、爾も至上者の預言者と称へられん、蓋主の面前に行きて其の道を備へん、

ハリストスよ、爾の創傷を以て吾が靈の慾を醫し、爾の脅の刺さるるを以て惡鬼の傷ま
しく我を刺すを止め、爾の釘を以て我が逸樂の欲望を釘うちて、我に無慾にして爾の尊き
苦と復活とに伏拜するを得しめ給へ。

彼の民に、其救は即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。

救世主よ、美しき童貞女は爾人の子より美しき者を生みたりしに、爾が苦の時に華麗も
なく華榮もなきを見て、泣きて言へり、吾が子よ、我爾が智慧に超ゆる謙遜を奇とす、爾
は此を以て謙りたる人の性を救ひ給ふ。

此の矜恤に因りて、東旭は上より我等に臨めり、

パスハのイルモス 1 調「新たなるイエルサリムよ光光れよ、」

イルモス

あらたなるイエルサリムよ光 光れよ、 主の光榮 爾に
輝きたればなり シオンよ、 今祝いて 楽しめ
爾潔き 生神女よ、 爾が生みし主の復活を 喜び たまえ。

神の衆民よ、光潔なる心を以て來りて、前に置かれたる十字架を見、畏を以て之に接吻し、
喜を抱きて其上に擧げられし光榮の主を常に讚榮せよ。

幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん為なり。

じゅうじか なんじ わ いのち しんせい うつわ しゅざい なんじ うえ のぼ われ すく ため わき
十字架よ、爾は我が生命の神聖なる器なり、主宰は爾の上に升りて、我を救はん爲に脅を
さ 刺されて、血と水とを流し給へり、我喜を以て之を領けて、彼を讚榮す。

光榮は父と子と聖神に帰す

せい かみ われ なんじ い さんしや せい ゆいいちしや ちち こ せいしん ゆいいち はじめ ゆいいち くに ぼんゆう
聖なる神よ、我は爾位の三者、性の惟一者、父、子、聖神、唯一の原始、唯一の國、萬有を
さいせい しゅ ふくはい
宰制する主に伏拜す。

今も何時も世々に、「アミン」

しふく どうていじよ なんじ おおい やま そのうち い もの あらわ しんせい
至福なる童貞女よ、爾は大なる山、ハリストスの其中に入りたる者と現れたり、神聖な
るダウイドの呼ぶが如し、我等は子たる神を以て此に由りて天に升るを得たり。

我等の神よ、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す。

しんせい ていしやく じゅうじか ぐんし ゆうりよく われら なんじ たの たたか もの おそ なんじ ふくはい
神聖の帝笏たる十字架、軍士の勇力よ、我等爾を待みて、戦ふ者を畏れず。爾に伏拜す
われら つね しょてき か え たま
る我等に常に諸敵に勝つを得しめ給へ。

(詠) イルモス1調 「^{まこと}嗚呼、母童貞女、^あ真の生神女、種なくハリストス我が神、身にて十字架に擧げ

られし主を生みし者や、我等信者皆宜しきに合ひて今爾を彼と偕に崇め讚む。」

第9歌頌-2

鳴呼、母童貞女、真の生神女、
たねなくハリストスわがかみ身にて十字架に擧げられし
主を生みしものや、われら信者みな宜しきに
かないて今爾を彼とともにあがめほむ。

続けて「常に福」

常にさいわいにして 全くきずなき生神女
 我が神の母なる爾を讚美するは 眞まことにあたれ一り
 ヘルビムよりとうとくセラフィムにならびなくさかえ
 貞操みさおを壊やぶらずして神言かみことばを生みし実の生神女たる爾を崇なんじめほ一む

【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。 (詠) 主憐めよ。
 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ。
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。
 (詠) 主爾に
 司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」

主あわれめよ 主 なんじに アミン

<続けて>

特別 光耀歌 (エクサポスティラリ)

至尊しそんなる木きは 齋もいみの中節ちゆうせつに於て凡おいそ己およの苦難おのれを以て宜くなんしきに合もつひてハリストスの苦難かなに
 従したがふ者ものを伏拜ふくはいの爲ために招く。信者しんじゃよ、皆みな來りて、畏おそるべき奥密おうみつの木きに伏拜ふくはいせん。

十字架生神女讚詞、

聘女よめならぬ聘女よめ、純潔じゅんけつなる神言かみことばの母ははは歎なげき泣なきて呼よべり、子こよ、ガウリイルが我われに攜たづへし
 福音ふくいんの喜よろこびは此かくの如ごときか。言いひ難がたき旨むね及び神聖しんせいなる定制ていせいを成就じょうじゆせん爲ために往ゆき給たまへ。

<戻る。枠のP16へ>

齋3

くづけ スティヒラ 【挿句の 讃頌】

われら なんじ とうと じゅうじか おく ものいみ みち なかば す いの なんじ ひ
我等は爾の尊き十字架に送る 齋の途の半を過ぎて祈る、爾の日、アウラムが生ける
イサアクを岡の墓より受けて喜びし日を、信を以て敵より救はれし我等にも見るを得しめ、
ひみつ ばんざん あずか へいあん よ たま われら こうしょうおよ きゅうせいしゅ こうえい なんじ き
秘密の晩餐に與りて、平安に呼ぶを賜へ、我等の光照及び救世主よ、光榮は爾に歸す。

(本来は2回)

句) しゅ つと なんじ あわれみ もつ われら あ しか われらしょうがいよるこ たの
主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しま
なんじわれら う ひ われら わざわい あ とし か われら たの たま ねが
ん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願
はくは なんじ わざ なんじ しょぼく あらわ なんじ こうえい そのしょし あらわ
はくは爾の工作是爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

(スティヒラ繰り返し略)

句) ねが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま
願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給
わ て わざ たす たま
へ、我が手の工作进行を助け給へ。

【致命者讃詞】

か ちめいしゃ なんじら くる もの おどし おそ くるしみ もつ たのしみ
勝たれぬハリストスの致命者よ、爾等は苦しむる者の恐嚇を畏れずして、苦を以て樂と
な じゅうじか ちから もつ まよい か えいえん いのち おんちよう う いまなんじら ち われら
爲し、十字架の力を以て迷に勝ちて、永遠の生命の恩寵を受けたり。今爾等の血は我等の
たましい ため いやし な われら たましい すく いの たま
靈の爲に醫治と爲れり。我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

【十字架生神女讃詞】

ひと あい しゅ われら せつせい うみ なかば とお すくい みなど なんじ じゆう くるしみ とき う
人を愛する主よ、我等は節制の海の半を過りて、救の港として爾の自由なる苦の時を受
けん。然れども 爾は慈憐洪恩の主なるに因りて、我等に爾の光榮なる復活の日をも平安に
み え たま
見るを得しめ給へ。

←戻る。 **枠** P19「至上者よ」へ

六時課

齋4【預言のトロパリ】八調

しゅさい われら なんじ ふくはい なんじ せい ふっかつ さんえい
主宰よ、我等爾の十字架に伏拜し、爾の聖なる復活を讃榮す。

大齋第4週 水曜日:(6調)



神よ、凡そ爾を求むるものは 願くは爾の為に喜び た-のしまん

◆ポロキメン第6調

司祭 謹みて聴くべし。

誦經 ポロキメン かみ およ なんじ もと もの ねが なんじ ため よろこ たの
提綱、神よ、凡そ爾を求むる者は、願はくは爾の爲に喜び樂しまん。

誦經 (句) わざわい われ のぞ もの ねが しりぞ あざけ
禍を我に望む者は、願はくは退けられて嘲られん。

司祭 えいち
睿智。

誦經 イサイヤのよげんしょ よみ (26-27章)

み しゅ その すまい い ち あ もの その ふほう ため ぼつ ち その の ち
視よ、主は其居所より出でて、地に在る者を其不法の爲に罰せんとす、地も其呑みたる血を

あらわ またそのころ もの おお そのひ しゅ おも おおい かた つるぎ もつ なお はし
露し、復其殺されたる者を掩はざらん。當日主は重くして大なる硬き劍を以て、直く走る

へび およ まが うね へび う またうみ あ りよう ころ
蛇「レウィアファン」、及び曲り紆る蛇「レウィアファン」を撃ち、又海に在る龍を殺さん。

そのひ なんじらかれ こと すなわちあい ぶどうえん こと うた われしゅ これ たも こくこくこれ そそ ちゅうやこれ
當日爾等彼の事、即愛すべき葡萄園の事を歌へ、我主は之を保ち、刻刻之に灌ぎ、晝夜之

をまも これ おか い もの ため われ いかり しか も たれ われ てき そのうち
を護る、之に侵し入る者なからん爲なり。我に怒なし、然れども若し誰か我に敵して、其中

いばら おどろ た われこれ むか たたか ことごと これ や つく あるい われ まもり はし わた
に棘と荊とで樹てば、我之に向ひて戦ひ、悉く之を焚き盡さん。或は我の防護に趨り付

きて、われ わへい むす しか われ わへい むす こうらい ひ ね ふか
きて、我と和平を結ばんか、然らば我と和平を結ぶべし。後來の日にイアコフは根を深くし、

イズライリは芽を出し、め いだ はな ひら み せかい み そのかれ う かれ う もの
イズライリは芽を出し、花を發き、果は世界を盈たさん。其彼を撻ちしは、彼を撻ちたる者

をう ごと そのかれ ころ かれ ころ もの ころ ごと なんじかれ す
を撻ちし如くせしか、其彼を殺ししは、彼を殺したる者の殺されし如くせしか、爾彼を棄つ

るとき、度を以て彼を罰せり、東風の日に於けるが如く、爾の強き吹嘘にて彼を吹き出せり。

此に縁りてイヤコフの不法は抹され、之に因りて結ぶ果は其罪を除くを爲さん、即彼が諸

祭壇の悉くの石を碎けたる石灰と爲し、森と日の像とは再建たざらん時なり。

〈→梓へ戻る P36〉

晩 課

齋 5 【主よ、爾によぶ】を4調

①
主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主やわれ

②
に聞きたまえ 主やなんじに呼ぶすみやかに我れにいたり

③
たまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え

終
主やわれに聞きたま え ねがわくは我が祈りは香炉の香りの

④
②
③
ごとく汝がかんばせの前のぼりわが手をあぐるはくれ

終
の祭のごとくいれられん 主やわれに聞きたま え

誦經 主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる

言に傾きて、不法を行ふ人と共に罪の推諉せしむる母れ。

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を

そのまえ あらわ わ たましいわれ うち よわ とき なんじ われ みち し わ ゆ みち
其前に顯せり。我が靈 我の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ たため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんじ よ い
者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云へ

なんじ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われ
り、爾は我の避所なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我

はなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
甚弱りたればなり、我を迫害する者より救ひ給へ、彼等は我より強ければなり。

<中略>

(句) 我が靈を獄より引出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ、
自調の讚頌、第4調

しょぜん ゆえん ものいみ いまそのちゆうせつ い す えん さ ひ もつ よろこび な これ さき ひ
諸善の縁由なる齋は今其中節に入り、過ぎ去りし日を以て悦を爲して、是より先の日を

よ もち もち すす けだしますますぜん きんろう ますますぜん くわ
も善く用いんことを勧む、蓋益善に勤勞せば、益善は加はる。

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

じゅうじか てい しの たま しゅ われら ていざい へいあん いのち おく よろ かな
十字架に釘せらるるを忍び給ひし主よ、我等に定罪なく平安に生を送り、宜しきに合ひ

ちちおよ せいしん とも なんじ さんえい もの なんじ しんせい あずか え たま
て父及び聖神と偕に爾を讚榮する者に爾の神聖なる「パスハ」にも與るを得しめ給へ。

(句) 主よ、我深き處より爾に籲ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

又讚頌、第5調。

ひそか しょとく おこな ぞくしん むくい のぞ もの いちおよ ちまた これ あらわ ころ うち まも
隠に諸徳を行ひて、屬神の報を望む者は市及び街に之を顯さずして、心の中に守る、

しゅうじん ひそか おこな し しゅ われら せつせい むくい たま われら ものいみ おこな ときうれ さま
衆人の隠に行ふことを知る主は我等に節制の報を賜ふ。我等は齋を行ふ時憂はしき容

な わ たましい みつしつ いの た よ てん いま わら ちち いの われら
を爲さずして、吾が靈の密室に禱りて、絶えず呼ばん、天に在す吾等の父よ、祈る、我等

いざない みちび なお われら きょうあく すく たま
を誘に導かず、猶我等を兇惡より救ひ給へ。

(句) 願くは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

せい ちめいしゃ なんじら たましい あい かたが あい かれ い しゅじゅ くるしみ
聖なる致命者よ、爾等は靈の愛を傾けてハリストスを愛し、彼を諱まずして、種種の苦

を忍び、殘虐者の強暴を倒し、屈せず撓まざる信を守りて、天に移り給へり。故に主の前に

勇を得て、世界に平安、我等の靈に大なる憐を賜はんことを祈り給へ。

(句) 主よ、爾若し不法を糾さば、主よ孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬しまん爲なり。

我等皆齋の水を以て靈を洗ひて、生を施す尊き主の十字架に就き、信を以て伏拜して、

神聖なる光照を斟み、平安と、大なる憐と、永遠の救とを得ん。

(句) 我主を望み、我が靈は主を望み、我彼の言を恃む。

使徒の誓たる十字架、首領、能力、天使首の繞る所の者よ、爾に伏拜する者を凡の害よ

り救ひ、我等に善く齋の神聖なる途を過ぎて、救の日に至るを得しめよ、我等此を以て

救はれん

(句) 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し

我等今日主の十字架に伏拜して呼ばん、生命の木、地獄を破る者よ、慶べ、世界の歡喜、朽壞

を滅す者よ、慶べ、爾の力を以て惡鬼を逐ふ者よ、慶べ。信者の固、勝たれぬ武器よ、

祈る、爾に接吻する者を護りて聖にせよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

(生神女讚詞 八調)

今日性の捫られぬ者は我に捫らる、我を苦難より解く者は苦難を受く。譬に光を賜ふ者は不法の口より唾せられ、虜にせられし者の爲に其肩を筈に予ふ。至浄なる童貞女母は彼を十字架に見て、痛く哀しみて曰へり、噫嘻吾が子よ、何ぞ之を爲したる、衆人より美しき者は氣息なく、華榮なく、美しき容なき者と現る。噫嘻吾が光よ、我爾の寝ぬるを見るに忍びず、心は裂かれ、利き劍は我が靈を貫く。我爾の苦を尊み歌ひ、爾の慈憐に伏拜す、恒忍の主よ、光榮は爾に歸す。



光榮は父と子と聖神に歸す、いまもいつも世—世にアミン



われを 苦難より解く者は 苦難を受く めしいに 光を

賜う者は 不法の口より 唾^{つばき}せられ 虜^{とり}にせられし者のため-

其の^{かた}肩に むちうちに あたう 至浄なる 童貞女 ははは
母

彼を十字架に見て、痛く哀しみて いえ-り ああ 吾が子よ

何ぞこれを 為した-る 衆人より美しき もの-は

いき^い息なく、華^{みば}栄えなく、美^{さま}しき容なき者と 現^{あら}わ-る

ああ 吾が ひかりよ 我爾^いの寝ぬる見るにしのびず

心は裂かれ、利き剣は我が霊を つらぬ-く 我 爾の苦しみを

尊とみう た-い 爾の慈憐に伏はいす

終結
恒忍の主よ、光栄は 爾に 帰-す

齋6 【ポロキメン】と旧約聖書の読み

輔祭 謹みて聴くべし

司祭 衆人に平安

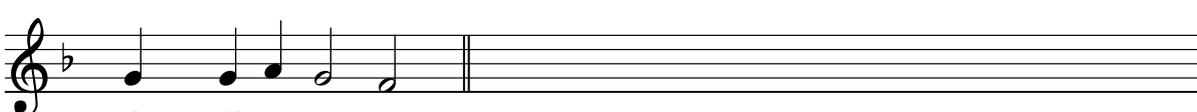
輔祭 睿智、謹みて聴くべし

誦経 ポロキメン、主神、イスライリの神、獨奇跡を行ふ者は崇め讃めらる。

晩4-水1 (4調)



主、神 イズライリのかみ ひとり奇せきを行う者は



崇め讃めらる

誦経 (句) 神よ、爾の裁判を王に賜ひ、爾の義を王の子に賜へ。

(詠) 繰り返す

誦経 主神、イスライリの神、獨奇跡を行ふ者は

(詠) 崇め讃めらる。

司祭、睿智。

誦経、創世記の讀 (第9、10章)

司祭、謹みて聴くべし。

【創世記七章】

誦経 ノイの諸子、方舟より出でたる者は、シム、ハム、イアフエトなりき。ハムはハナ

アンの父なり。是れノイの三人の子なり、全地の諸民は彼等より出でて廣まれり。ノイ地を

耕すことを始めて葡萄園を樹えたり、葡萄酒を飲みて酔ひ、其幕の中に在りて裸と爲れり。

ハナアンの父ハムは其父の裸なるを見て、出でて其二人の兄弟に語れり。シムとイアフエ

とは衣を取りて、之を兩肩に掛け、後向に行きて其父の裸體を蓋へり、彼等の面を後に向

けて、其父の裸體を見ざりき。ノイ酒醒めて、其稚子の如何なる事を彼に爲ししかを知れり、

乃 曰へり、ハナアン詛はるべし、彼は諸僕の僕と爲りて其兄弟に事へん。又曰へり、シ

ムの主神は崇め讃めらるる哉、ハナアンは彼の僕と爲らん、願はくは神はイアフエトを廣大

にせん、願はくは彼はシムの幕に住はん、ハナアンは彼の僕と爲らん。ノイは洪水の後 三百

五十年生存せり。ノイの 齡は總て九百五十年なりき、而して死せり。ノイの子シム、ハム、

イアフエトの世系は是なり。洪水の後彼等に諸子生れたり。

輔祭 謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン、我に在りては神に近づくは善し。



誦經 (句) 神は何ぞイズライリ人に、心の淨き者に仁慈なる。

(詠) 繰り返す

誦經 我に在りては

(詠) 神に近づくはよし

輔祭 命ぜよ。

両手に香炉と火つけた燭台を取り、宝座の前に立ち、東に向かって十字を描いて、

司祭 睿智、肅みて立て。

(それから西に向き直って、会衆に向かって)

司祭 ハリストスの光は衆人を照す。 (このとき会衆は伏拝する。) ¹

司祭、睿智。

¹ エルサレムの聖墳墓教会の受難週に灯りを取る儀式から始まったと言われる。

誦經、箴言の讀。(第 12、13 章)

達者は知識を蔵し、愚なる者の心は愚なる事を示す。勤むる者の手は主り、惰る者は

貢を納めん。憂は人の心に在りて彼を屈ませ、善き言は彼を樂します。義者は其鄰に途

を示し、悪者の途は彼等を迷はす。惰る人は獵せし物を燔かず、勤むる人の産業は價貴し。

義の途には生命あり、悪を忘れざる者の途は死に至る、智慧ある子は父の教訓を聴き、不順

の子は責を聴かず。人は其口の果に因りて善を食ひ、不法の者の靈は悪を食はん。其口を

守る者は己の生命を守り、其唇を廣く咄くる者は艱難を來す。惰る者の靈は望めども得

る所なし、勤むる者の靈は飽かん。義者は謊の言を惡み、悪者は羞を蒙りて勇な

らん。義は罪なき者を其途に守り、悪は罪人を仆す。自ら富めりと爲して一も有るなき者

り、自ら貧しと爲して財多き者あり。人は其富を以て己の生命を贖ふことあり、唯貧し

き者は威嚇を聴くこともあらず。義者の光は輝き、悪者の燈は滅ゆ。詐偽ある靈は罪中

に迷ひ、義者は恵みて憐む。

(次に先備聖體禮儀を行ふ)